

和楽器と日本伝統音楽の普及の一施策として：
コロンビア大学MPプログラム音楽専攻者による活動
に焦点を当てて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): 和楽器, 日本伝統音楽 キーワード (En): Japanese Musical Instruments, Heritage Music 作成者: 山本, 華子, Yamamot, Hanako メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/707

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



和楽器と日本伝統音楽の普及の一施策として

—コロンビア大学 MP プログラム音楽専攻者による活動に焦点を当てて—

A Different Approach to Spreading Japanese Musical Instruments and Heritage Music :
Focusing on the Activities of Music-Major Participants
in Columbia University's Mentor/Protégé Program

山 本 華 子

Hanako Yamamoto

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

2007年から始まったアメリカのコロンビア大学の雅楽・邦楽 MP プログラム¹⁾は、2006年にコロンビア大学音楽学部に設立された雅楽・邦楽のカリキュラム²⁾参加者対象の和楽器の夏期集中研修である。毎年、アメリカの大学が夏休みに入る5月末から7月初めまでの6週間、選抜された参加者は日本に滞在しながら専攻楽器を集中的に学ぶ。往復の渡航費、宿泊費、稽古代などはプログラムを運営する中世日本研究所・日本文化戦略研究所が負担する。

2007年にまず雅楽部門が始動し、2012年には邦楽部門が追加された。雅楽では基本的に三管（箏・尺八・笛）の一つを、邦楽では箏か尺八のいずれかを選び、滞在期間中、個人稽古を受けながら実技を磨いていくものである。年度によって同楽器の参加者が選ばれ、すべての楽器が揃わない年もあったが、これまでの参加者は計43名³⁾にのぼる。

2016年に十周年の節目を迎えたことにより、運営側でプログラムの変遷を振り返った⁴⁾。筆者は、プログラムの成果として、①雅楽アンサンブルの実技向上、②参加者の日本音楽・文化体験への関心の高まり、③音楽専攻者による日本音楽普及の3点を挙げた⁵⁾。本稿はこの③の成果に焦点を当て、具体化したものである。プログラム参加者は音楽専攻者とそうではないものからなる。音楽専攻者は自らの専攻において、プログラム終了後に身につけた和楽器の実技を様々な形で発信しており、活かしている。日本の伝統音楽を発信、普及するのは、必ずしも日本国内の専門家に限られたものではなく、海外の専門家は別の視点から貢献していると言える。

外国から参加者を招いて伝統音楽を体験させるプログラムは隣国、韓国にも見られる。韓国の国立国楽院では、いち早く国楽（韓国の伝統音楽）の海外普及に力を入れている。1990年代初期から海外の音楽専攻の学生、教授を対象とした研修を行っており、現在は2001年から始まった「国際国楽研修」⁶⁾を毎年運営している。韓国側が費用（往復航空券、宿泊費、研修費）を負担して、海外から招かれた音楽の専門家が国楽の理論、実技を集中的に学べるものである。その目的は国楽普及、国楽院または音楽

家の海外進出、海外の音楽家とのネットワーク構築などである。結果として、海外の作曲家が国楽を用いた楽曲を作るようになり、それを国楽院の管弦楽団が演奏し、さらに国楽院によるアメリカ演奏ツアーも実現している。このように韓国には国家主導の伝統音楽を海外に普及するプログラムがあるが、日本においては国家が関わるプログラムは今だ構築されていない。

一方、日本の民間団体が主催している外国人が学べる邦楽プログラムとしては、正派邦楽会による「インターナショナルサマースクール」⁷⁾が挙げられる。このプログラムは2016年に設立され、夏季の1週間、外国人あるいは英語で学びたい日本人が参加し、希望した邦楽器の稽古を受け、最後に発表会で成果を披露するものである。

アメリカの大学の組織が運営している日本の伝統音楽のためのMPプログラムは、国営の韓国の例に比べ経済的な基盤は弱いだが、研修の内容は充実していると言える。まず、参加者は前提として大学のカリキュラムで実技を学んでいるため、初心者ではない。むしろ、応募者から選抜される時点で、ある程度の実力が認められている。彼らは6週間の研修期間、稽古三昧の日々を過ごし、練習に明け暮れる。その成果をプログラム終了間際の発表会で披露する。毎年、筆者は当プログラムのコーディネータとして初回の稽古に同行するが、6週間後の発表会での演奏を聴くと、その成長ぶりに驚かされる。なかには帰国してからも続けたいと思い、高価な楽器を購入していく者もいる。

そこで、本稿では海外主導のMPプログラムの成果として、特に音楽を専攻する参加者の事例を挙げながら、日本の伝統音楽の普及について考察することにする。

1-2 研究の対象と方法

本研究は、これまでのMPプログラム参加者（音楽家）の活動を追う作業が必要である。2016年と2017年に筆者が行ったアンケート調査の回答を見て、現在、プログラム成果を活かした活動を行っている者、あるいは今後行うと思われる者を選び出し、さらに聞き取り調査を行い、その内容を紹介した。参照した調査回答は、アンケート調査の質問「MPプログラムによる変化」「MPプログラムの意味」、聞き取り調査の質問「MPプログラムの意味」「MPプログラム後の活動」「今後の活動」によるものである。

本研究に関するアンケート・聞き取り調査の対象者は表1に挙げた。すべて海外在住者であるため、メールによる調査となった。

表1 アンケート・聞き取り調査の対象者

氏名	研修楽器	参加年と所属 ⁸⁾	調査日	専門・専攻	居住国
岩崎健人 Kento Iwasaki	邦楽（箏）	2013 無所属	2016年8月5日、9日、 2017年8月22日	作曲	アメリカ
リッシュ・リンズイー Lish Lindsey	雅楽（龍笛）	2015 無所属	2016年7月20日、27日	フルート	アメリカ
ヘンリー・リャン Henry Liang	雅楽（笙）	2015 無所属	2016年7月13日、24日、 2017年8月22日	フルート	オーストラリア
清水チャートリー Chatori Shimizu	雅楽（笙）	2015 修士2年	2016年6月6日、7月26日、 2017年8月23、25日	作曲	アメリカ
デヴォン・ティップ Devon Tipp	雅楽（箏・篳篥）	2016 無所属	2016年8月5日、 2017年8月20日	作曲・バスーン	アメリカ
榎井徹 Toru Momii	雅楽（笙）	2017 博士2年	2017年8月5日	音楽学	アメリカ
ルツィエ・ヴィツコバ Lucie Vitkova	雅楽（箏・篳篥）	2017 客員研究員	2017年8月1日	アコーディオン・ 舞踊・作曲	アメリカ

2 研究対象者の活動

表1にあるように、本研究対象者の専攻は、演奏、作曲、音楽学と様々である。また、研修楽器は雅楽の三管がほとんどで、邦楽は箏1名のみである。これは、前述した通り、邦楽部門が雅楽部門に比べ遅く始まったこと、また邦楽部門の中でもしばらく尺八研修者が選ばれなかったことにも起因していると思われる。

研究対象者の活動を整理すると、概ね演奏、作曲、研究、教育の4つの分野に関わっていることが分かる。しかも、彼らはそれぞれ一つの活動だけを行っているわけではなく、いくつかの活動を兼ねている場合が多い。

以下、研究対象者がどのような活動を行っているか、表1の調査内容に基づいてまとめた6名の事例を紹介する。

2-1 岩崎健人 Kento Iwasaki

作曲家の岩崎健人は2012年より箏を始めた。アメリカでは沢井流、MPプログラムでは宮城流、アメリカに戻ってからは山田流に転向した。

プログラム後の音楽活動はそれまでと比べかなり方向性が変わったという。邦楽をとり入れた作曲活動、和楽器奏者とのコラボレーション、箏の即興演奏などを積極的に行っている。

箏とフルート、箏と尺八の曲、箏が登場するオペラ《愛しきえもの》、三味線・唄・尺八による劇《情炎》、最近では箏とオーケストラのための《Thank the Stars》を作り、自らが演奏にも参加している⁹⁾。



写真1 自作《Thank the Stars》の箏パートを演奏する岩崎健人

2-2 リッシュ・リンズィー Lish Lindsey

フルート奏者であるリッシュ・リンズィーは、2014年にコロンビア大学の雅楽アンサンブルで龍笛を始めた。プログラム後は龍笛の演奏を様々な場所で披露した。MPプログラムは彼女の演奏家としてのキャリアを広げてくれた。フルート以外に日本の龍笛、中国の横笛、インドのバンスリなども演奏できることがマネジメント会社にも知られるようになり仕事のオファーも増えた。特に龍笛を身につけてから西洋人作曲家による龍笛の作品、例えばデビッド・ロープ《Preludes for East Asian Pipes》やホヴァネス《Sonata for Ryuteki and Sho》などがレパートリーに加わった。また、自らの即興演奏による作品《Meditations for Ryuteki and Sho》も披露している。

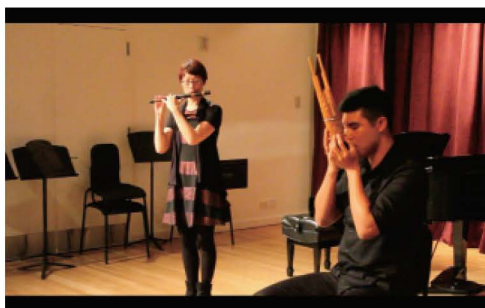


写真2 リッシュ・リンズィー（左）とヘンリー・リャン（右）の即興演奏

2-3 ヘンリー・リャン Henry Liang

リッシュ・リンズィーとともに2015年度に参加したヘンリー・リャンは、オーストラリア在住のフルート奏者である。コロンビア大学の雅楽アンサンブルには参加していなかったが、笙を学びたくて応募してきた。例外的に初心者であったが、フルート演奏の基盤があったため、かなりの早さで笙を身につけた。プログラム後はオーストラリアを基盤に笙を演奏したり、レクチャーコンサートなどに参加している。オーストラリアに笙の奏者がいなくてこれまで演奏されなかった、オーストラリアの作曲家による作品を初演した。

2-4 清水チャートリー Chatori Shimizu

2012年に在籍していた日本の国立音楽大学で初めて笙を学んだ清水チャートリーは、卒業後、アメリカのコロンビア大学に留学する。そこで雅楽アンサンブルに加わり、MPプログラムにも参加することになった。現在、アメリカのピッツバーグ大学の非常勤講師をしており、要請があれば笙の演奏、講義なども行っている¹⁰⁾。作曲家という立場から、演奏は限られた場、例えば自作品の演奏やインストレーション内での即興演奏などを行い、講義は主に作曲技法の観点あるいは現代音楽のコンテクストで使われている笙の奏法などについて行うようにしているという。笙のための合奏曲として、『四季と雲海Ⅱ』、『EROSION』などを作曲した。

清水チャートリーは自作『EROSION』について、以下のように述べている¹¹⁾。

クラリネット奏者のトーマス・ピアシー氏の委嘱を受けて作曲した。「浜辺に寄せては引いていく波」のように、音楽の「呼吸」に重点を置いた作品である。作品内で使用されている技法やモチーフは極力シンプルなものだが、むしろそのために各呼吸（モチーフ反復の一つ一つ）の重要度が高まる。宮田先生・三浦先生¹²⁾とのお稽古では、呼吸の重要性を第一に教わった。この「呼吸」を作曲で表現した作品が『EROSION』である。

The image shows a page of a musical score for the piece 'EROSION' by Chatori Shimizu. The score is written for a large ensemble, including multiple staves for Flute (Flauto), Clarinet (Clarinete), Bassoon (Fagotto), and Sheng (笙). The notation is complex, with many notes and rests, indicating a highly detailed and rhythmic composition. The score is presented in a standard musical notation format with a key signature and a time signature.

楽譜 1 清水チャートリー作曲『EROSION』(2016)

五

2-5 デヴォン・ティップ Devon Tipp

デヴォン・ティップは作曲家でありバスーン奏者である。コロンビア大学の雅楽アンサンブルで2015年に筆箒を始めた。母親が日本人であるため、自分のルーツを掘り下げるために和楽器を始めたという。筆箒の他に尺八も学んでいる。筆箒に関しては、春に行われる雅楽アンサンブル恒例の演奏会で演奏しただけで、今後、筆箒のためのコンサートを開きたいと考えている。プログラム後の変化として、和楽器を手にとって理解しながら作曲するようになったという¹³⁾。

2-6 榎井徹 Toru Momii

日本人留学生としてアメリカに渡った榎井徹は、西洋音楽を中心に学んでいたため、日本の音楽に対する知識がなく、自己のアイデンティティについて悩んでいたという。その時にはじめてアメリカで雅楽を聴く機会を得て、2015年に笙を学ぶことになった。音楽学専攻である榎井徹は、「雅楽そのものの楽理・楽器の奏法に配慮した独自の分析法の研究を進める必要性」¹⁴⁾を感じているという。そこで、2017年11月には米国音楽理論学会の総会で変形理論を用いた笙の手移りの分析法について発表するに至った。

上記の6名以外にも2016年に笙を学んだ作曲家のザック・セリグマン・カレン、2017年に箏を学んだ音楽家のルツィエ・ヴィッコバが今後、演奏・作曲などで成果を披露するものと期待される。特にルツィエ・ヴィッコバはチェコ出身であるため、帰国後はチェコひいてはヨーロッパに日本の雅楽を普及する役割を担うだろう。

3 プログラムの成果

3-1 海外への普及

前章で述べたように、現在、音楽家として活動するプログラム参加者たちがそれぞれの活動を通して、日本の雅楽・邦楽を海外に広める様子がうかがわれる。その際に古典曲の演奏を通して伝統的な形を伝えることと、雅楽・邦楽を用いた現代曲（即興演奏も含める）を演奏する場合が考えられる。伝統音楽を本来の形で伝えることはもちろん大切であるが、それを海外で受け入れやすい形に変容させて、魅力を伝えることも彼らの役割ではないだろうか。それには身につけた知識や基本的奏法を忘れずに、思慮深く活動していく必要があるだろう。すなわち、海外では自分の演奏によってはじめてその楽器と音楽に触れる聴衆がいるということをつねに意識して、責任感をもって活動するべきであろう。

3-2 日本への影響

日本滞在中のプログラム参加者の活動として、日本の学校教育に関わるものがある。具体的には①日本の小学校での雅楽授業に協力すること、②日本の高校生とともに合奏すること、③日本の大学の講義に招かれること¹⁵⁾が挙げられる。①に関しては、MPプログラムの箏の指導者である中村仁美が世田谷区立塚戸小学校に雅楽の特別講師として招かれる際に、プログラム参加者も共に参加し、日本の小学生の雅楽器体験に協力をしている。プログラム参加者は、言葉が通じなくても、小学生に手取り足取り音の出し方を示し、子どもたちはそれを真似するという形をとる。②の高校生との合奏は、参加者の練習場所を提供している東洋英和女学院中高部で参加者の成果発表会として行う「ランチコンサート」に、同校の高校生と共演するものである。高校生は、その年の音楽授業の内容によって雅楽が箏のどちらかの演奏に加わる。そのため、中高部の音楽教師の指導のもと授業時間に合同練習が行われる。

上記の活動はいずれも義務的なものではなく、参加年の状況や参加者の意思によって組み込まれるものである。日本人にとって、このような自国の音楽を日本の外にいる外国人あるいは日本人留学生から

紹介してもらう経験はある意味、「逆輸入」とでも言える不思議な体験である。教育面ではそれが大きな刺激となり、日本人として自国の文化を知る必要性を一層強く感じる効果がある。プログラム参加者の活動は、海外にだけ影響を及ぼすものではなく、日本においても効果を発揮するため、今後、積極的に取り入れるべきだと考えている。

3-3 洗足学園音楽大学におけるゲスト授業

前節に関連する活動として、筆者は洗足学園音楽大学における授業「東洋音楽史」と「日本の伝統芸能と音楽」に、MPプログラム参加者をゲストとして呼び、彼らの実演や講義を取り入れることを行ってきた。

「東洋音楽史」では2回程、プログラム参加者を講義に招いた。1回目は2014年1月9日に、2013年の参加者の一人がプログラム後、再度日本を訪れたので、最終講義で笙を実演とともに紹介してもらった。2回目は2014年6月12日に、同年の参加者が三管揃っていたので各楽器の紹介と雅楽の合奏を披露してもらった。いずれも参加者は日本語が話せなかったので、英語を用い通訳を別途つけたため、受講生は英語で自国の音楽である雅楽や雅楽器の説明を聴く体験をした。

「日本の伝統芸能と音楽」においては、2017年7月24日の清水チャートリーによる「現代音楽における笙」についての講義が挙げられる。作曲家である清水チャートリーがわかりやすく現代音楽を紐解き、海外で音楽家として活動する上で重要なポイントを述べ、自作《四季と雲海Ⅱ》を紹介した。受講生も同じ日本人の若者が、海外で日本の音楽を用いた活動を行っていることを知り、新鮮に感じたようである。授業に関するアンケートの中で「日本人として日本の文化をしっかりと学ぶことの大切さも改めて感じた」という回答が目についた。

このように授業内でプログラム参加者を招くことによって、学生は普段触れることが難しい雅楽を外国人や日本人留学生が海外で発信していることを知り、驚きを覚えるようである。日本人の学生にとって、外からの視点を持って自国の音楽を見つめ直す良い機会になっていると思われる。

4 まとめとして

これまで概観したように、コロンビア大学MPプログラムの成果として、音楽専攻者の活動が日本伝統音楽の普及の一翼を担っていることが分かった。徹底した個人稽古によって培われた演奏技術をもって海外では日本の伝統音楽を発信し、日本滞在中は日本人に啓蒙的な影響を与えている。

10年を経て見えてきたMPプログラムの成果をもって、日本における伝統音楽の普及を支えているのは日本在住の音楽家だけではなく、海外在住の音楽家の役割も大きいことが証明される。今後は、日本の伝統音楽家の育成を、在外人を含め幅広く検討する必要があると思われる。

さらに、2017年から日本の幼児教育でも「わらべ歌」などの日本の伝統音楽の重要性が言及され始めた現状を見ると、日本国内だけでなく海外に向けた日本の伝統文化の普及にも、日本の国家が主体的にかかわる必要性を感じる。

謝辞：参加者へのアンケート調査とメールによる聞き取り調査回答の和訳は、清水チャートリー氏が引き受けて下さった。この場を借りてお礼を述べたい。

注

- 1) MPプログラムのMPはMentor/Protégéのことで、Mentorは「師匠」、Protégéは「弟子」を意味し、当プログラムでは師匠と弟子が対峙する口頭伝承による日本伝統楽器の稽古が中心となる。
- 2) 正式名称はThe Gagaku-Hōgaku Classical Japanese Music Curriculum and Performance Programである。「World Music Ensemble: Gagaku」「World Music Ensemble: Hogaku: Shakuhachi」「World Music Ensemble: Hogaku: Koto」の3クラスがあり、いずれもコロンビア大学の全学生が受講可能で、単位も取得できる。
- 3) そのうち1名は楽器を変えて2回参加している。
- 4) パーバラ・ルーシュ、青木健 2016「日本音楽プログラム始動」『雅楽だより』第47号1, 4-8。
- 5) 山本華子 2017「運営面から見た外国人のための和楽器教習ーコロンビア大学MPプログラムを例に一」『洗足論叢』第45号93-104。
- 6) 当研修については、韓国国立国楽院の担当者イ・ペウオンにメールによる聞き取り調査（2016年8月19日）を行った。
- 7) <http://www.seiha-hogaku.jp/2017-program-details/>（2017年11月22日アクセス）。
- 8) 所属とは、コロンビア大学における所属のことである。当アンサンブルに参加している学外の学生や演奏家は無所属とした。
- 9) 公演の様子は<https://www.youtube.com/watch?v=8NhnDVm1Ra0>にアップされている（2017年8月25日アクセス）。
- 10) 欧米の諸大学に招かれ、作曲にどのように邦楽器を用いるかについて講義を行っている。
- 11) 清水チャートリーがメール（2017年11月23日）で述べた。
- 12) MPプログラムの笙の指導者である宮田まゆみと三浦礼美のことである。
- 13) プログラム後の作品としては《Splintered Ringing（尺八ソロのための）》、《Splintered Ringing（二本の尺八のための）》、《Hear-Here（二本の尺八、または尺八とクラリネット（Eb, Bb, Bb bass, Eb contralto, BBb contra）のための）》、《Funf Traumen（ブリベアド箏のための）》、《Selbstportrat（尺八ソロ、ブリベアドピアノ、そしてブリベアド弦楽三重奏のための）》、《Points on a Missing Line（尺八ソロと、時間の決まっていないテープのための）》などがある。
- 14) 榎井徹 2017：5。
- 15) 一例として、洗足学園音楽大学の筆者が担当している授業「東洋音楽史」「日本の伝統芸能と音楽」への参加については、3-3で詳細を述べた。

引用・参考文献

- クリストファー遙盟、山本華子 2012「コロンビア大学MPプログラムの邦楽部門が始動」『邦楽ジャーナル』第310号33
- 薦田治子 2008「海外への日本の芸術文化の紹介」『世界の芸術文化政策』放送大学芸術振興会、149-164
- 政策研究大学院大学編 2016『実演芸術で世界とつながる～分野を超えてネットワークを広げ、深めるために』政策研究大学院大学
- 清水チャートリー 2017「現代音楽の中の笙～ニューヨークからの視点～」『雅楽だより』第49号3-4
- 寺内直子 2015「越境する雅楽：海外の大学カリキュラムにおける日本伝統音楽」『国際文化学研究』第44号1-28
- 寺内直子 2006「コロンビア大学での雅楽コース新設について」『雅楽だより』第7号5-6
- 寺内直子 2009「ニューヨークの雅楽」『雅楽だより』第9号10

- 日本音楽国際交流会編 2015『世界における日本の古典音楽—海外の目から見た—』日本音楽国際交流会
- バーバラ・ルーシュ 2008「雅楽の若木をニューヨークで育てる」『雅楽だより』第12号 8
- バーバラ・ルーシュ 2009「[ニューヨークコロンビア大学雅楽管絃アンサンブル] 始動」『邦楽ジャーナル』第269号 47
- バーバラ・ルーシュ、青木健 2016「日本音楽プログラム始動」『雅楽だより』第47号 1, 4-8
- 榎井徹 2017「雅楽との新しい出会い」『雅楽だより』第51号 4-5
- 山本華子 2017「運営面から見た外国人のための和楽器教習—コロンビア大学 MP プログラムを例に—」『洗足論叢』第45号 93-104
- 山本華子 2010「2010年度 MP プログラムを終えて」『雅楽だより』第23号 9-10
- 山本華子 2012「2012年度 MP プログラムを終えて」『雅楽だより』第31号 5-6
- ルース・エミリー・ローゼンバーグ 2007「コロンビア大学雅楽・邦楽プログラム夏期集中研修に参加して」『雅楽だより』第11号 8